

初期教員の技と芸——中澤岩太と鶴巻鶴一

京都高等工芸学校開校120周年記念特別展「デザインの夜明け——京都高等工芸学校初期10年——」より

美術工芸資料館 特任専門職（学芸員） 和田積希

現在、美術工芸資料館では、京都工芸繊維大学の前身校のひとつ、京都高等工芸学校の開校120周年を記念して、「デザインの夜明け——京都高等工芸学校初期10年——」展を開催中である（会期：2022年10月3日～12月17日）。

京都の伝統産業界に科学的知識と新しいデザインを取り入れるべく、明治35年（1902）9月に開校した京都高等工芸学校では、図案科の初代教授で洋画家の浅井忠（1856・1907）をはじめ、才能溢れる教員たちの指導の下、ポスターや工芸品など国内外から集めた多彩な資料を教材として、実践的な工芸教育がおこなわれた。そのかつての教材が、現在当館のコレクションの基礎となっていることは周知のとおりである。本展覧会では、それらを一堂に会し、ご覧いただくとともに、明治45年に8回目の卒業式に合わせておこなわれた「京都高等工芸学校創立10年記念会」の展示の再現を試みている。

さて、今回注目したいのは、京都高等工芸学校での教育の基礎を築いた初期教員たちの知られざる技と芸である。初期教員には、浅井をはじめ、図案科初代教授で建築家の武田五一（1872・1938）、助教教授で洋画家の牧野克次（1864・1942）、講師で洋画家の都島英喜（1873・1943）など芸術家が多数在籍した。一方で、初代校長の中澤岩太（1858・1943）や色染科の初代教授で2代目校長となる鶴巻鶴一（1873・1942）は化学者でありながら、芸術に親しみ、雅号をもち、みづから筆をとる作家でもあった。

に日本画を学んだ。同僚の浅井には洋画を学んでいる。本展に出品されている《登龍図》には狩野派の、《猿と柿》（図1）には円山四条派の作風がみとれる。彼の作家活動は趣味ではおならず、関西美術会の展覧会にも出品されている。芸術家との交流もさかんで、文人画家の富岡鉄斎（1837・1924）とは親密な絵や書簡のやりとりが残されている。篆刻にも興味をもち、作品の落款にもみられる「中澤岩太」「工学博士」などの印章が残るほか、同僚に自作の印章を送っている。

また、中澤は書道家でもあった。その作品のひとつに「宝珠」がある。中澤はおそらく還暦の頃から、記念日や集まりごとの際に「宝珠」を描いて、それに署名押印し、周囲の人に配っていたようである。同僚宅でさまざまな「宝珠」がみつかったというが、なかでも当館が所蔵する《宝珠》は、本紙の横幅が150cmを超える巨大なもので、その力強い筆さばきはみるものを圧倒する（図2）。中澤74歳の款記があり、校長退官後の筆とみられるが、学内での式典の際などには、しばしば壇上に飾られたようである。

続いて鶴巻鶴一は、現在の新潟県加茂市に生まれ、東京帝国大学応用化学科を卒業後、明治32年に京都市立染織学校校長に就任、翌年に本校色染科教授に任命され、開校前にドイツのクレーフエルトに留学をして染色法を学んだ。染色教育のかたわら正倉院宝物などにみられる古代の染色技法「蒔縷」の復元に成功し、さらに大正2年（1913）に「墨流し」の再現である「波紋染」の開発もおこなっている。遊陶園、京漆園では図案家として活動し、大正2年には中澤や機織科の教授萩原清彦（1877・1937）らと染織研究団体である道楽園を結成している。

鶴巻は、研究のかたわら、留学先のクレーフエルトを「クレ（呉）フェルト（＝フィールド、野）」と読み替えたという「呉野」や故郷に由来する「七谿」の号を用いて、みずからの図案によるテーブルクロスや壁掛、帯や着物など多彩な染色作品を生み出した。鶴巻の



図1 中澤岩太（北莊） 猿と柿 制作年不詳 個人蔵



図2 中澤岩太（北莊） 宝珠 1931年 AN.2419



図3 鶴巻鶴一（呉野、著尾清） 刺繍 博多地産縮更紗桐竹風模様丸帯 1928年以前 AN.5829.28



図4 鶴巻鶴一（呉野） 絹地縮更紗桐竹風模様丸帯 1928年 AN.5829.16

中澤の経歴を少し振り返れば、現在の福井県に生まれ、明治4年に若くして福井藩の藩校明新館でウィリアム・グリフィス（1843・1928）の指導をうけ、翌年1月に東京大学の前身である大学南校に入学する。応用化学を学び、明治12年に東京大学を首席で卒業したのちドイツ人化学者ゴットフリート・ワグネル（1831・92）のもとで助教をつとめた。明治16年に製造化学研究のためベルリン大学に留学。マイセンの陶磁器試験所などで研究を積み、帰国後、教授に就任。一方で印刷局抄紙部の製業事業や硫酸製造事業などにも関わり、明治24年に工学博士を授与されている。輝かしいまでの経歴である。

そんな中澤の転機は明治30年のこと、新設された京都帝国大学理工科大学の学長として赴任し、明治33年には京都高等工芸学校の設立準備委員に選ばれ、2年後に校長に就任する。この準備期間中、ヨーロッパを視察し、ちょうどパリに留学中であつた東京美術学校西洋画科教授の浅井をデッサンの指導者として、本校にスカウトしたのも中澤である。

一方で、明治34年に洋画の普及と研究を目的に結成された関西美術会やその養成所である関西美術院のほか、京都の伝統産業界の研究団体である遊陶園、京漆園などの団体会員職をつとめて、名実ともに京都の美術工芸界の中心的存在であつた。

そんな八面六臂の中澤の知られざる一面が「北莊」の雅号をもつ画家としての顔である。東京時代、狩野友信（1843・1912）に師事した中澤は、京都で四条派の流れを汲む前田玉英（生没年不詳）

作品は、かつて本館（現3号館）の貴賓室をかざっていた《唐獅子牡丹蒔縷屏風》が知られているが、近年まとまった数の作品が発見され、その一部が当館に寄贈されている。そのなかには、《博多地産縮更紗桐竹風模様丸帯》（図3）などの伝統的な図柄から、《絹地蒔縷下ガ作《舞台の踊り子》模様壁掛》（図4）などのヨーロッパの絵画にヒントを得た作品まで、多様なモチーフがみられ、前者には道楽園の園友のひとりであつた刺繍作家、著尾清（1888・?）によると推定される刺繍もほどこされている。

鶴巻の蒔縷による作品は、大正7年の農商務省工芸品展覧会への出品をきっかけに、百貨店の後押しをうけて、傘やインテリアなど多方面に展開され人気を博した。昭和3年（1928）には大丸呉服店で個展を開催しており、その際つくられた作品集に、図3が収録されている。退官後は、京都市山科区の琵琶湖疎水のほとりに建てた本野精吾（1882・1944）設計の邸宅にアトリエを設けて、制作に励んでいたようである。

化学者であり芸術家でもあった彼らは、両者に対する深い理解と情熱をもとに、科学と芸術を結びつけ、伝統工芸の近代化に大きな役割を果たした。

彼らの活動に少しでも興味の湧いた方は、ぜひ会場に足をお運びください。

参考文献

- ・「中沢岩太博士喜寿祝賀記念帖」中沢岩太博士喜寿祝賀記念会、1935年
- ・並木誠士ほか編「京都 近代美術工芸のネットワーク」思文閣出版、2017年